

ひとつの回想

二 瓶 敏

私は、1955年に東大大学院に入り、山田先生のゼミに参加を許されてから、土地制度史学会の研究会や、その他先生をかこむ私的な研究会などで、晩年まで先生の指導を仰いできた。そうしたなかで得た感想を記してみたい。

1968年の春のことである。この年、毎年6月に行われる土地制度史学会の春季総合研究会を理論・現状部門が担当する順番になっていて、先生を中心としてその企画・準備が進められた。この頃、前年11月以降のロンドン金市場におけるゴールド・ラッシュに続く3月の金プール停止があり、アメリカにおけるベトナム反戦運動・黒人暴動の広がり、フランスにおける5月のゼネスト等があいつぎ、戦後のアメリカを中心とする資本主義世界体制の動揺が明瞭になってきていた。日本経済は、1962、65年の不況を乗り越えて「高度成長」を再開させていたが、対米中心に輸出を拡大し、「財政硬直化」が問題とされるほど財政支出への依存を深め、矛盾を内外に拡げつつあった。こうしたなかで、先生は、IMF体制の解体と、それとかかわる日本資本主義の構造的矛盾の問題を、春季総合研究会の柱として構想された。そして、学会外から桑野仁氏や本学の雪山慶正氏を招いて、国際通貨問題・黒人運動の話をお聴きすることも織りまぜながら、数度にわたって準備研究会がもたれた。私は、丁度この年、広島大学から専修大学に移り、準備研究会に毎回出席することができたのであるが、戦前の『日本資本主義分析』をめぐって「範疇の固定化」などと悪口を言われている山田先生が、実はこのように現実の動きに鋭く眼を配り、それを理論構成にとり込むことに貪欲なほど強い関心を示されたことについて、あらためて眼を見張る思いをさせられたものである。

だが、考えてみればこれは当然のことで、人並み以上に鋭い現実感覚がなかったならば、『分析』をはじめとする先生の仕事はありえなかつただろう。しかし、何と言っても先生は理論家で、——「理論家である」ということを先生はつねに重視された——現実から与えられる素材をどう理論的に把握するか常に腐心された。この点で、先生が、「現実重視」を強調しながらその実現象に足をとられてゆく傾向と無縁であったのは言うまでもないが、同時に先生は、新しい現実素材を既成の理論の枠のなかに流し込んで事足りるとする傾向をも厳しく批判された。農地改革後の日本の土地所有を「分割地所有」・「農民的土地所有」という範疇でとらえることに対する批判も、その一つであった。「分割地所有」という範疇は、資本主義の初期、資本の分散が優勢な下において、封建的土地所有の廃絶の結果生まれた農民の土地所有で、

農業発展の土台となりえたものであるが、改革後日本の高度な独占の支配の下におかれた零細地片所有をこれと同一視することはできない、というのがその理由であった。またある研究会で、日本をアメリカと同様に「国家独占資本主義」として論じた人に対し、先生は、「アメリカは私的独占が国家を経済に引張りこむということが言えるが、戦後日本の場合には、アメリカに支えられた国家が崩壊した独占をつくり直したのだ」ということを言われたことがある。また、戦後における「産業循環の変容」を説いた人に対し、「今の段階では産業循環の定型そのものが崩れているのではないか」と言われたこともある。

つまり、先生が鋭い感覚で現実（＝「特殊」）を受けとめ、これを理論化しようとする時、その作業はつねに「一般」理論の前提の吟味と結びつけられていたのであって、こうして「一般」が成りたつ条件を明らかにすることによって、「特殊」の「一般」への安易な解消を戒められたのである。

だが、このような先生の考え方は、やはり先生の「全機構的把握」という見地と深いかわりをもっていたように思われる。先生が再生産論を重視されたのは周知のことだが、それは、ここにおいて諸範疇の編成による一つの構造が把握されるからであり、またこの構造把握を基準として、その生成・確立・解体・再編成の諸段階が見通せるからである。この「構造」と「段階」の把握という全体的視野の下で、個々の範疇ははじめてそれに応じた位置づけを得ることができ、その存立条件も明らかにされうる。こうして、先生は、まず理論の次元において、「一般」法則が含む内包とその外延をできるだけ具体的に明らかにし、「一般」法則を現実との生きた対応関係においてつかもうとされたのである。先生は、ある時、日本におけるマルクス経済学の解説に対して、「マルクスをマッチ箱のように小さくしてしまう」という不満をもらされたことがあるが、それもこのような、抽象的理論をも具体的につかもうとする問題意識からであったろうと思われる。

このように、一方、「特殊」と「一般」との緊張関係を厳しく見つめながら、「一般」法則の前提・含意をつかみ出そうとする努力のなかから、先生独特のシェーマが生み出されて来たのであろう。マルクス再生産表式の前提を検討し、これは「ケネー『経済表』の揚棄であり、その揚棄の最も根本的な条件の一つはマルクス地代理論の完成である。問題はこの一点にかかると」（「再生産表式と地代範疇」）と喝破して、「二つの農業革命」に制約されるケネー経済表からマルクス再生産表式への移行のシェーマを打出されたことは、こうした先生の研究方法の顕著な表われであったと言ってよいだろう。レーニン表式の前提に、再生産構造基軸の軽工業から重化学工業への移行を認め、これをシェーマ化して戦後日本資本主義分析に適用するという方法も、その一つであったであろう。

だから、山田先生が「特殊」の「一般」への解消を批判されるのは、しばしば誤解されてい

るように「一般」を拒否することではないのである。むしろ、先生は「一般」法則をはるかに深くつかみ、一方では「一般」法則の前提・内包を掘り起してこれをシェーマ化し、他方では「一般」法則が貫かれる具体的形態＝段階を把握し、こうした、いわばタテとヨコの理論装置を築きあげたうえで、これを媒介として「特殊」の範疇と構成とを位置づけ、確定する、という方法をとられたのだと思う。こうした方法によって、「特殊」と「一般」とを単に外的に対比するのではなく、また「特殊」を「一般」からの単なる量的偏倚としてつかむのでもなく、「特殊」を「特殊」たらしめる質的なモメントを確定しながら、それを「一般」法則が貫かれる「特殊」な様式として把握するという道が開かれたのではないだろうか。

最近私は、ある雑誌に、先生の学問の生涯を回想して短い追悼文を書いたのであるが、これを書きながら、先生のシェーマが実に頑強に、戦前から戦後にかけて生き続け、生き続けたうえで新しい事態に即応して展開されてきたことをあらためて教えられて、驚きの念を禁じえなかった。あれこれの「理論」がうたかたのように現われては消えて行くなかで、先生の理論のこの強靱な生命力は何に由来するのか。それをわがものとするのは容易なことではないけれども、少なくともそれを受け継ぐ努力を怠るべきではない。——いま先生から受けた指導のあれこれを思い返しながらか、このように思うのである。

山田先生を偲びて

加藤 幸三郎

1980年は、わたくしたち日本近・現代史研究を志すものにとっては、極めて重要な年であった。

有賀喜左衛門・平野義太郎・大内兵衛・山田盛太郎・野原四郎といった諸先生が、79年末から81年初めにかけて、つぎつぎに逝かれた。極めて痛恨事であったと同時に、改めて諸先生の先駆的業績に注目したいと思う。

これらの諸先生に共通している点は、条件の違いはあれ、戦前における「暗い谷間の嵐」にもめげず戦後も現在に至る最期の最期まで、学問的にも思想的にも、はた又平和運動の面でも、つねにわれわれの先頭に立ちつづけられたことである。

山田先生を中心としたわが「社研」の再発足に続いて（当時私は「新前」の社研事務局の一人だったが）、「特定研究 明治・大正・昭和における日本近代化の研究」に参加すべく申請書を提出せねばならなくなったことがあった。そのため吉沢芳樹事務局長を中心に、一生懸命書類作りに努力を傾けた。たしか昭和40（1965）年の秋だったように思う。山田先生は「一晩考えて、よければ提出します」と断を下されて、一同シュンとしたことを思い出す。この結